大河の一滴

大森 黎

読売新聞社

大河の一滴

大森 黎

大河の一滴　　定価　九八〇円

著　者――大森　黎　堀池撫子
八木みち子　山本あい

編集人――守屋健郎

発行人――加藤祥二

発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所――大日本印刷株式会社

製本所――ナショナル製本

第一刷――昭和五十六年九月七日

第二十九刷――昭和五十七年三月六日

0095―703120―8715

© 1981, Yomiuri Shimbun-sha.

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

第二回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」入賞作品集

大河の一滴　目次

大賞　大河の一滴　大森　黎　5

入賞　パリの猫はニャアと鳴く　堀池　撫子　81

佳作　めし炊きの詩　八木みち子　145

佳作　銀色の翼　山本　あい　205

選後評　佐藤　愛子　265

選考経過　269

装丁　朝倉　摂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

大河の一滴

大賞

大河の一滴

大森 黎

おおもり　れい　本名、小山玲子。昭和七年十月一日生まれ。宮城県出身。昭和十四年兵庫県西宮市甲東小学校入学。昭和二十年宮城県古川市古川国民学校卒業。昭和二十六年宮城県立古川女子高等学校卒業。昭和三十年東北大学法学部卒業。卒業と同時にＮＨＫ放送文化研究所で世論調査、昭和三十二年からＮＨＫ教育局ディレクター。昭和三十七年退職。同年結婚。

今年になって私は多恵子に三通のはがきを書き、多恵子からも三通が返ってきた。多恵子は三通ともお年玉つき年賀葉書に書いてきたので、郵便受のプラスチックの蓋にはがきの朱色が透けて見え、ほら多恵子さんからよ、と私をつぶやかせた。

四通目は、私が出さぬうちに来た。これも朱色のはがきだったが、表書きの漢字がいつもより不揃いで、私の名も多恵子の名もちぢかんでいた。ひとりで遊びに来たいと書いてあった。『でもこのことはウチノヒトにはヒミツにしてください』と片仮名傍点つきであった。

「困ったわ」思わず声になった。

見まわしたが聞いていたのは玄関に寝そべっていた老犬だけで、夫も、息子の洋介も、家にはいない時間だった。

多恵子が一人で来るのは危険だ。まして多恵子の夫の宏に知らせずにおくことなど出来はしない。

しかし私は、私が心から「多恵子さん」を歓迎していると感じさせる返事を書かなければならない。それでいて、たとい駅までは無事に来られたとしても、そこから此の家に辿り着くには難関がある、と多恵子自身が億劫になってあきらめてしまえるような文面をつくらなければならない。

「多恵子さんがひとりで来たいと言ってきてるのよ。しかも宏ちゃんには内緒で」

晩酌のとき私が言うと、夫は案の定「ええっ」と語尾を曳き、かすかにだが眉根を寄せた。夫は宏の父である。夫と私とは十七歳年齢がひらいている。私と宏とでは、八つしか年が違わない。宏の妻多恵子と私では、たったの四つ違いだ。

「返事、出しました。厳重な封書。絵地図入りの。駅の階段降りて広場に出たら、バスならこう、タクシーならこう。運転手さんに行先言うときの言葉も鉤かっこつきで書いたわ。でも、もし運転手さんに何か訊き返されたら、そのときはどうなるんでしょう」

多恵子は耳が聞こえない。二年前、真珠腫性中耳炎の手術の後、聴覚を失った。喋ることはできるのだが、喋っている自分の声も聞こえない。こっちの言葉は勿論、外界の物音の一切が聞こえない。その上多恵子はカリエスの後遺症で、一本だが松葉杖で躰を支えなければ戸外は歩けない。

「来る日がいつの何時頃って予めわかっていれば駅まで迎えに行きます。でも宏ちゃんに言うなっていうんだもの。あのひとたちの家に電話をかけるわけにもいかない。

わたしが必ず家にいる日も書いたわ。それでも万一いなかったらと、玄関の鍵の隠し場所まで書いちゃった。でも……」

三週間が過ぎた。

手紙が効を奏したらしいことが私にはうしろめたかった。しかしこれで多恵子を独り歩きの事故からまもれたとも思ったし、宏に秘密をつくらずにすんだことでほっとしてもいた。

「連休に二人で泊まりにいらっしゃいって、宏ちゃんに電話してみましょうか」

と、私は夫に言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「来たくなれば宏の方から電話をかけてくるよ。連休には友達とどこかに出かける計画をたてているかもしれないし」
「あざみ会の仲間？」
「ああ」
宏が多恵子と知り合ったのも、その〝あざみ会〟という身体障害者の集まりである。
「ま、彼らのことは、もうあまり気にするな。宏だって来年は四十だ」
あの宏が四十に、という思いが私にはある。その私の思いを、夫につねに知っていて欲しいという思いがある。
「そうか、宏ちゃん、四十になるか……」
私はつぶやくように言った。

郵便受のチャイムが鳴った。カーテンごしにガレージの向こうの門を見たが、人の姿が見えなかった。また子供のいたずらだ、と私は茶の間にもどった。五月も末近い、よく晴れた日の午前十一時。庭は、蘇芳、ライラック、海棠、山吹が満開で、縁先の三坪ばかりの芝生も青みを増した。躑躅と小手毬の咲く四つ目垣の向こうが、一段低くなったガレージで、車の灰色の屋根が花の間から見える。車は、定年後二度の勤めに出ている夫の駅までの送り迎えに私が使う。
ふと見ると、ガレージの中で、ひょこっひょこっと小さな頭が動いた。また子供らがかくれんぼだ。私は玄関に急いだ。子供らは隠れついでに釘やガラス片で車体を引掻く。
不意打ちをするつもりだった。腕いっぱいに大きくドアを押し開いた。

私は一瞬どんな顔をしただろう。
「いらっしゃい、よく来たわ、ほんとよ、よく来たわ」
多恵子だったのだ。多恵子が、松葉杖をついた左肩をいからせて、ガレージからポーチへ、五段ある石段を一段また一段とあがってくる。喋りつづけずにはいられなかった。スリッパを揃える間も廊下を後ずさりしながらも、私はくり返した。「元気そうよ、それが何よりだわ、よかったわ、ほんとよ」
廊下に寝ていた犬が、のっそりと躰を起こした。
「ひとりで来たいって、何か相談事でもできたの？　宏ちゃんのこと？　あなたのこと？　あ、いけません、ジョン平っ」
犬が、多恵子の歪んでつき出た腰に鼻面を近づけ、においを嗅いだ。
茶の間の坐椅子にクッションを重ねた。多恵子は、ズボンの足を斜めに投げ出すようにして坐椅子に倚りかかり、三、四回背中と腰をずりあげるように動かしてからようやく坐った。
「とうとう来てしまいましたよう」
と多恵子が言った。黒い小さな目が、眼鏡の奥からじっと私をみつめた。目も鼻も口もひとところにすぼまったような小づくりの、色白の顔から汗がふきだしている。
「洋ちゃんの背、高くなったでしょう」
「ええ、ええ、もうこんなよ。中学三年だもの」
私は右手をあげ、見あげる身ぶりをし、左手の指を三本たてた。
「そんなに大きくなったんですかあ」
多恵子がまたじっと、私を視た。

多恵子が初めて私の前に姿を現したとき、洋介の背丈が多恵子と殆ど同じだったことを私は憶い出した。あのとき洋介は小学校二年。多恵子が三十六。宏、三十二。私は四十歳だった。東京、渋谷のハチ公前広場。七年前になる——私が洋介の小さな手をしっかりと握りしめて立っている。夫が私の肩のすぐ後に立っている……。

穏やかな春の日暮れどきで、噴水のまわりに立ったり坐ったりしている人々も夕映えの光のなかにいる——。

「宏ちゃんがどんな人をつれてきても、おどろかないわよ、わたし」

ふりかえって見あげたが、夫は無言だった。焦点の定まらぬ目を、空に向けていた。約束した時間を十数分過ぎていた。地下鉄、私鉄、国電が入り組んでいるターミナルデパートからは絶え間なく人の群が吐き出されていた。

「あっ、来たっ」

最初に気づいたのは洋介だった。ぴょんぴょんと跳びあがり、

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」と叫んだ。休みで工場の寮から家へ帰ってくるたびに、動かなくなった玩具の電車や自動車を根気よく修理してくれる宏を、洋介は慕っていた。

松葉杖を両の小脇についた宏が、先ず人群の中から姿を現した。宏が立ちどまった。宏の回りを次次と人が流れて行く。宏はグレーの背広に赤っぽいネクタイをしめている。私は目をこらした。そして、息をのんだ。宏より小柄だとは聞いていた。松葉杖を一本ついているとも聞いていた。しかし宏は二級障害者、相手は三級で宏よりも軽度だということに気をゆるしていた。なんということだ。こんなに小さく、こんなに背と腰がひしゃげたように縮まった人が現れるとは。どうやってこの人を正

視せよというのだ。
「ああ、だめだわ、わたし……」
呻くような自分の声を私は聞いた。何がおどろかないわよだ、何がどんな人をつれてきてもだ。
洋介が私の手から自分の手をふりほどこうとしていた。洋介が私の顔を見ていた。
「やあ」
夫が大声をあげ私を突きのけた。
夫が多恵子に近づき、かがみこむようにして両手をさし出していた。一瞬、夫と宏と多恵子が、流れに逆らう黒々とした一塊りの岩のように見えた。
駅前ビル九階のロシア料理の店に行くことに予め決めてあった。夫が先頭に立った。宏と多恵子が並んだ。洋介がその後に続いた。洋介がふりかえる。またふりかえる。そうしなければ私がそのまま人群にまぎれ、彼らから遠ざかってしまうとでも言いたげだった。
見馴れることができるだろうか。宏を見馴れたように。もう一度1から始めることが私に出来るか。
エレベーター前は混んでいた。乗るとき多恵子の頭が私のみずおちのあたりに押しつけられた。前髪をさげ、ビロードのリボンを結んだポニイテール。まるで少女の髪型だ。それにこのフリルのついた丸い大きな衿。宏より四つ年上と聞かされてその覚悟はしてきた。しかしほんとうにこの人は私より四つしか年下でないのか。私は、多恵子の小さな頭を眺めつづけることが出来なかった。
日曜日の夕方のレストランは家族づれが多かった。そのざざめきが不意に跡切れる中をウエーターに案内されて、一番奥の窓際の席まですすんだ。
テーブルにつくと、多恵子の胸から下がすっぽりとかくれた。夫がウエーターにクッションを持っ

てこさせた。
「あなた、ビール飲めますか」
と夫が訊いた。多恵子は目を伏せたまま身じろぎもしない。薄い唇を少し突き出すようにして固く閉じている。
「少しぐらいなら飲めますよ」
宏が代わって答えた。
洋介にはオレンジジュースをあてがって、乾杯をした。
「わたしたちの新しい出会いのために」
と私が言った。多恵子とまだ一度も目を合わせず、挨拶らしい言葉も交わしていないことをそれで埋め合わせたつもりだった。宏がてれたような笑いをうかべた。
「お兄ちゃん、カンパイッ」
洋介が叫んだ。宏のコップにカチンと合わせ、次は多恵子に向かって勢いよくコップをつき出した。多恵子が自分のコップをテーブルの上で、ほんの少し洋介の方に押してよこした。その手首と指が洋介のそれと較べて、ずっと太く節高なことに私は初めて気づいた。手だけは確かに、水仕事もしてきた三十代の女の手だ——。現在は電気器具の製作工場で寮生活をしながら、組立作業をしていると聞いていた。重度心身障害児の施設で、下働きをしていたという経歴を聞いたのも憶い出した。
「あなたの足は、宏に較べるとずっと軽いねえ」
夫がウオッカのグラスを片手に、多恵子に笑顔を向けて言った。
多恵子が、静かに顔をあげた。

「わたしは短い方の足には……」
その小さな顔や少女のようないでたちからは想像もつかないほど、音程の低い、はりのない声だった。洋介までが、しんとなった。
「わたしの短い方の足は、底を特別に高くつくってもらった靴をはいているから、それで……」
「いやあ、そんなこたあ、ちっとも」
夫が大きな声になって言った。
「わたしも足が悪くてねえ。何年、松葉杖をついたかなあ。戦争中にね、大陸で、迫撃砲にやられましてねえ。破片が尻から大腿部まで今も入ってる。雨が降りそうになると、右足がねえ、しびれて、冷たくなってくる。あなたにもそういうことがありますか」
「いいえ」
多恵子が、うつむいたままぼそっと答えた。
「おやじさんの足とぼくらの足を並べてみたって意味ないよ」
宏が言った。宏の顔に冷笑のようなものがひろがっているのを、私は見た。透明なガラス戸を突然引くようなそんなものいいを、これまでにも宏は私になら何度かしてきた。しかし父親に向かってするのを見たのは初めてだ。あ、宏はもう、この人との結婚を決めたのだ、と私は思った。たとい多恵子の障害が予想を越えたことを理由に反対したとしても宏の気持は変わるまい。それに宏に対して身体障害者同士の結婚をすすめたのは他ならぬこの私なのだ——。
窓の外は夕映えだった。赫みがかった藤色の雲が、ターミナルデパートの上にあった。
見おろすと、広場では、バスが歩道ぞいに楕円を描いて停留所に入り、長い行列をつくっていた人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com